

裁判所事務官・裁判所書記官 職員インタビュー



「かーくん」↑
(家庭裁判所キャラクター)

東京で働く、採用1～3年目
の事務官や、若手書記官に
インタビューしてみたよ！

「働いている職員の声を聞いて
みたい！」というリクエストに
お答えしました。



「さいたん」↑
(裁判所ナビゲーター)

※ インタビュー記事では、次の言葉を使用しています。

地裁：東京地方裁判所

簡裁：東京簡易裁判所

公判：刑事事件の法廷での裁判

立会：法廷での業務のこと



現在、どんな仕事をしていますか？

事務官 A：地裁民事部で、主に書記官事務を補助する業務を行っています。具体的には、事件関係の F A X や郵便の処理、窓口対応や電話対応、開廷準備、新件の処理などを行っています。

事務官 B：地裁刑事部の事務官として書記官事務の補助や裁判員裁判の準備等を行っています。

事務官 C：簡裁の民事部門にある少額訴訟の専門部で働いています。書記官のサポートとして郵便物の受付や発送、電話対応、備品管理等の庶務的な業務を行っています。この部署には事務官が一人しかいませんが、書記官の方々と協力しながら、日々の業務をしています。

書記官 A：地裁刑事部で働いていますが、主に、公判等の期日に立ち会って調書を作成したり、期日の準備のために検察官や弁護士と連絡をとったり、提出された書面等を適切に処理したりしています。

書記官 B：簡裁民事部門の書記官です。月に3回ほどの立会日には数十件ほどの事件に立会い、調書を作成します。裁判が円滑に進むように、裁判官や訴訟当事者と調整を行い、書面の発送事務や書面の提出期限の管理等を行っています。

どんなときに裁判所に入って良かったと感じますか？



事務官 A：周囲の書記官や裁判官に教育熱心な方が多く、仕事を根拠から丁寧に教えてもらえるので、裁判所職員として着実なステップアップを図れるところが良いと思います。採用当初はわからなかった専門的な知識を用いて、当事者に説明できたときは達成感を得ました。

事務官 B：目標となる人に出会えたときや私を育てようと周囲の方が様々な経験をする機会を与えてくださるときなどに裁判所に入って良かったと思います。裁判所は人でもっている組織であると実感しています。

事務官 C：法律を学びながら仕事をするのができることです。日々、書記官事務のお手伝いをさせてもらうのですが、その際に法律やその根拠条文を学ぶことができ、自分自身の成長に繋がっています。



書記官を目指すようになった時期と理由を教えてください！

書記官 A：採用試験を受ける前に裁判の傍聴に来たのですが、その時から「あの黒い服を着て働いてみたいなあ。」という漠然とした憧れのようなものはありました。より具体的になったのは、事務官となってから、身近で働く書記官の先輩方の姿を見たことです。

書記官 B：採用後すぐに目指すようになりしました。当時所属していた部署の書記官が、日々法律の専門職として議論している場面を見て、この中に入りたいとあこがれたことがきっかけです。

書記官 C：法学部出身だったので、裁判所に入る前から、書記官となって法律を使った仕事をしたいと考えていました。実際に裁判所に入ってから、民事部の事務官として配属された際に、自分もしっかり勉強して先輩たちに続けたいと強く思うようになりました。

書記官になってよかったことや、やりがいはなんですか？



書記官 A：事務官だったときよりも自分自身の判断で行える仕事が増え、よりやりがいを感じられるようになりました。簡易裁判所は国民に身近な裁判所で、法律知識をお持ちでない一般市民の方も多く利用されますが、このような方々から、裁判手続等に関する質問があった際、自分の工夫した案内で利用者の抱える不安を解消できたときなどは、特にやりがいを感じます。

書記官 B：普段の法廷の光景です。後ろに裁判官、目の前に当事者、その向こうに傍聴人、これだけの人がいながらこの手続を公証できるのは書記官である自分の調書のみです。それだけ権限のある書記官の仕事に日々やりがいを感じながら仕事に励んでいます。

書記官 C：送達事務、証明事務など自分の名前で仕事ができることは大きなやりがいだと思います。また、慣れないうちは手探りでやっていた仕事を、自分の工夫次第でスムーズに管理ができるようになったときなど達成感があります。書記官の仕事は多岐に渡るので学び続けられる環境、成長できる機会には恵まれていると思います。